

音声読み上げブラウザの読み上げかた

音声読み上げブラウザは、前後の文脈から読みわけをするわけではない。決められた法則によって、そこに書かれていることをそのまま読み上げる。誤読が生じたとすれば、それは誤読されるような文章を書いた人の責任となる。

使い慣れた人は、誤読があっても正しい内容を想像するというが、情報を提供する側がそれを期待してはいけない。誤読されるような文字や表現を使わないことが重要である。

米子市では、日本 IBM 株式会社の「ホームページ・リーダー バージョン 3.01」を検証に用い、「誰にでも利用できる『米子市ホームページ』」を作成する。

ウェブページ用原稿を作成するときには、「読み上げ例」を参考に、誤読の可能性の少ない文章を書くことを心がける。

英数文字

原則として半角を使用する。

一般的には全角・半角どちらでも問題なく読み上げるが、位取りの「,(コンマ)」を使用するときは注意が必要となる。

< 例 >

記述	読み上げかた
1,234	せんにひゃくさんじゅうよん
1, 234	いち にひゃくさんじゅうよん

記号

記号は、基本的に読み飛ばすので、特別の意味を記号に持たせることは避けるべきである。

見出し

「・(なかてん)」や「*(アスタリスク)」を見出しとして使うことがあるが、読み飛ばすため、読み上げ上の問題はないように思える。

しかし、HTML にはリスト作成のタグがあるので、記号ではなくこちらを利用する。

矢印

方向性を示すために「 (矢印)」を使用したくなるが、読み飛ばされるため、意図は伝わらない。

< 例 >

記述	読み上げかた
米子 鳥取	よなごとっとり

こういった場合には、「**米子から鳥取**」と記述するか、矢印の画像を用意して、「**から**」という代替テキストを入れるといった方法を用いる。

数式

「数式」を意図して書いた数字と記号の組み合わせは、数式として認識されない。

< 例 >

記述	実際の読み上げかた
1+1	いちいち
1+1=	いちいち
1 - 1	いちのいち
1 - 1=	いちのいち
1 * 1	いちいち
1 * 1=	いちいち
1X1	いちえっくすいち

読まれる記号

基本的には読み飛ばされる記号であるが、読まれる記号もある。特に文字と組み合わされたときに、注意が必要である。

- 日時

日時を表記する場合、記号を略号として使用することが多いが、ウェブページでは必ず「2004年11月14日午前10時」のように略さずに書く。

<例>

記述	読み上げかた
2004.11.14	にせんよん てん いちいち じゅうよん
2004-11-14	にいぜろぜろよん の いちいち の いちよん
2004/11/14	じゅういちぶんのにせんよん じゅうよん
11/14	じゅうよんぶんのじゅういち
10:00	じゅう ぜろぜろ
10:00am	じゅう ぜろぜろ あむ

am、pm ではなく、「午前」「午後」ときちんと書くこと。「a.m.」「p.m.」なら「エーエム」「ピーエム」と読むが、午前午後のほうが聞き手にとってはわかりやすい。同様に元号も「S」「H」とアルファベットで略さずに、「昭和」「平成」と書く。

曜日を表す際に(日)(月)という書きかたをするが、これも省略しない。

<例>

記述	読み上げかた
(日)	ひ
(月)	つき

曜日は(日曜日)(月曜日)と書く。

- 「～」

「から」を意図して使う記号であるが、これは意図どおり、「から」と読み上げられる。

< 例 >

記述	読み上げかた
午前 10 時～	ごぜんじゅうじから

ただし、**装飾に使ってはならない。**

< 例 >

記述	実際の読み上げかた
(バリアフリー社会を目指して)	ばりあふりーしゃかいをめざして
～バリアフリー社会を目指して～	から ばりあふりーしゃかいをめざして から

「から」と読ませたいときでもあまり使わないほうがよいと考える。

「ホームページリーダー」はたしかに「から」と読んだが、他の読み上げソフトがどうかはわからないからである。やはりきちんと「から」と書くべきである。

- **番地・電話番号**

番地や電話番号を表すとき、「 - (ハイフン)」を使うのが一般的であるが、これについては特に問題がないようである。

< 例 >

記述	読み上げかた
1 - 1	いちのいち
1 - 10	いちのいちぜろ
1 - 100	いちのいちぜろぜろ
10 - 1	いちぜろのいち
10 - 10	いちぜろのいちぜろ
113 - 10	いちいちさんのいちぜろ
1 - 5 - 6	いちのごのろく
23 - 5372	にいさんのごおさんななにい

ただし、**市外局番をつけた電話番号**表記には少し注意が必要である。

< 例 >

記述	読み上げかた
0859 - 23 - 5372	ぜろはちごおきゅうのにいさんのごおさんななにい
0859(23)5372	ぜろはちごおきゅうにいさん ごせんさんびやくななじゅうに
(0859)23 - 5372	ぜろはちごおきゅう にいさんのごおさんななにい

米子市では「(0859)23-5372」を基本とする。

【注意】

電話番号を記載するとき、「市民参画課(23-5372)」という記述をよくする。問題はないように思えるが、音声読み上げでは「しみんさんかくか にいさんのごおさんななにい」となり、突然読み上げられた数字がなんのことかわからない。

「市民参画課(電話:23-5372)」と書けば、これから読み上げられる数字は電話番号であるということがはっきりする。

単位

単位を表す記号は、機種依存文字がほとんどであり、その使用はアクセシビリティ以前の問題である。

そこで、単位記号と同じアルファベットを用いることでそれらしい表記を試みることになる。

< 例 >

記述	読み上げかた
m	えむ
5m	ごえむ
cm	しーえむ
5cm	ごせんちめーとる
5km	ごきろめーとる
5 平方 m	ごへいほうえむ
5 立方 m	ごりっぽうえむ
g	じー
5g	ごじー
5kg	ごきろぐらむ
5t	ごていー
5l	ごえる
5ml	ごみりりっとる
5KB	ごきろばいと
5kb	ごけーびー
5MB	ごめがばいと
5GB	ごぎがばいと

意図どおりに読まれたり読まれなかったり、また大文字と小文字で読みかたが変わったりとまちまちである。

「センチメートル」「キロバイト」と書いたほうが間違いはない。

金額単位

< 例 >

記述	読み上げかた
¥100	えんまーく ひゃく
¥100	ひゃく

記号を使わず、「100 円」のような表記をすること。

数えかた

< 例 >

記述	実際の読み上げかた
1つ (半角)	ひとつ
1つ (全角)	ひとつ
1人 (半角)	ひとり
1人 (全角)	ひとり
1人称	いちにんしょう
2つ (半角)	ふたつ
2つ (全角)	ふたつ
2人 (半角)	ふたり
2人 (全角)	ふたり
1か月	いっかげつ
1ヶ月 (「1かげつ」と入力して変換したもの)	いっかげつ
1ヶ月 (「1かげつ」と入力して変換したもの)	いっかげつ
1ヶ月 (「1」の後に「け」を入力してカタカナ変換した後、「つき」を加えたもの)	いっかげつ
1カ月 (「1」の後に「か」を入力してカタカナ変換した後、「つき」を加えたもの)	いっかげつ

略号

< 例 >

記述	読み上げかた
TEL	ていーいーえる
FAX	ふぁっくす

「TEL」はよろしくない。「電話」とちゃんと書くべきである。

「FAX」はちゃんと読んでくれるが、「ファックス」と書いたほうが親切かもしれない。

建物の階を表すときに「F」を使うことがあるが、これもよろしくない。

< 例 >

記述	読み上げかた
1F	いちえふ

「F」は用いず、「1階」と記述すること。

文字と記号の組み合わせは、誤読を誘発する可能性がたいへん高いため、できるだけ記号を用いず、文字表記をするというのが大原則である。

漢字

記号よりもアクセシビリティ上の問題になりつつあるのが、漢字である。
漢字には音読みと訓読みが存在する。これが読み上げソフトでは区別されないときがある。

「方」という字を例に挙げる。

< 例 >

記述	読み上げかた
その方は	そのほうは
お求めの方は	おもとめのほうは
方々	かたがた
書き方	かきかた

「書き方」のように、「かきほう」という読みかたが存在しない場合には、「かきかた」と読んでくれるのだが、「その方」のようにどちらでも読むことができる場合、「ほう」と読む。

誤読を招くおそれのある文字は、ひらがなで書いたほうがよい。

同音異義語

たとえば、「みにくい」という言葉は、「見にくい」と「醜い」の2つの表記があり、それぞれ意味が異なるが、音としてはどちらも「みにくい」である。
このような語については、「見にくい」であれば「見づらい」「見えにくい」、「醜い」であれば「美しくない」などの言葉に置き換え、誤解をまねかないようにする。
たとえ同じ文章中にどちらかしか出てこないときでも、こうした配慮はすべきである。

「は」

ひらがなの「は」は、「ha」と読むときと「wa」と読む場合がある。
音声読み上げブラウザでは、ほぼ自動的に正しい読みかたを選択するが、どちらともとれるときには注意が必要である。

<例>

「1人はこぶねに乗る」

この場合、音声読み上げブラウザでは、「ひとり はこぶねにのる」と読むが、書き手は「ひとりは こぶねにのる」というつもりで書いたかもしれない。

「1人、はこぶねに乗る」「1人は、こぶねに乗る」「1人は小舟に乗る」などのように漢字表記、読点で意図が伝わる書きかたをすべきである。

特に、句読点は、そこで確実に読み上げがいったん止まるので、きちんと打つこと。これを省くと、だらだらと読み続け、わかりにくい文章になってしまうことがある。

スペース

均等割付の目的で単語の間にスペースを入れていることがあるが、スペースが入ると単語ではなく**別々の文字**としてみなされるので使ってはいけない。

<例>

記述	読み上げかた
戸籍	こせき
戸 籍	と せき
知事	ちじ
知 事	ち こと

均等割付をする必要があれば、スタイルシートを使うこと。

また、場合によって、全角スペースが「**ブランク**」と読み上げられることがある。
デザイン上、スペースを使う必要があるときは、半角スペースを使うか、空白記号()を使用する。

ルビ

読み上げソフトではまだ対応していないようである。

< 例 >

記述	読み上げかた
<small>よなごし</small> 米子市	よなごしよなごし

ルビ未対応のブラウザで「米子市(よなごし)」と表示されるのと同様、漢字表記をまず読み、ルビ部分を次に読む。

たしかに同じ言葉が二度繰り返されるのは聞き手にとってはおもしろくないだろう。だが、固有名詞は誤読が多い。ルビにより正しい読みを表記しておけば、誤読の後に正しく読み上げられることになる。

まだ「新技術」扱いのルビであるが、今後、排除されることはないと思う。ブラウザや読み上げソフト側が対応していくことが考えられる。

「お役所言葉」

ずらずらと並ぶお役所言葉は、文意が伝わりにくいし、読んでいてもつらい。しかし音声読み上げブラウザには意図的な読み飛ばし機能はない。じっと我慢して、難解な言葉の羅列を聞き続けなければならない。その苦痛がわかるなら、わかりやすく優しい文章に書き換える努力を惜しんではいけない。「注1...注2にあげる場合以外の場合」などという書きかたは、もってのほかである。

また、「下記のとおり」「左のとおり」という表現も役所では好まれる。元が縦書きであったために「左のとおり」と書かれていた文章を、ウェブ用に横書きにしたため、指し示している「左」がなくなってしまった、というケースがよくある。このとき、「左」を「下」に書き直して、一応の配慮をしている場合もあるが、「左」にせよ「下」にせよ、方向を示す言葉は、目で見ていることが大前提となっている。音声読み上げでは、ふさわしくない表現といえるだろう。もし、どうしてもそのような表現を使うのであれば、「次のとおり」がよいと考える。

「リンク」での注意点

別ページに詳細なデータを用意し、「くわしくはこちらをご覧ください」とリンクを用意するケースも、あまりよいとはいえない。

「こちら」という表現が、音声読み上げでは「どちら」かわからない、というのがひとつ。

もうひとつは、「ご覧ください」という表現が、「目で見ると」ことを前提としているからである。

この場合には、本文中に

「くわしくは『(ページのタイトル)』でご確認ください。」

と記し、改行して

「リンク:『(ページのタイトル)』」

と表記したほうがよい。

リンクページを表示する際、新しいウィンドウを開かないことが原則とされている。

これは、音声読み上げブラウザ利用者が、新しいウィンドウが開いたことに気づきにくく、また、音声読み上げブラウザ自体が新しく開いたウィンドウを読み上げることができないからである。

しかしサイト外へのリンクなどは、新しいウィンドウで表示したほうがよい場合もある。そのときには、リンク先が新しいウィンドウで開くことを利用者に知らせる工夫が必要である。

音声読み上げブラウザでは、リンクの設定された場所にくると、音声が変わる。しかし、それが新しいウィンドウで開くかどうかの別は判断できない。

そこで、「リンク(新しいウィンドウで開きます)」といった注釈を作り手が加えることで、利用者の混乱はいくらか避けることができる。

ただし、ここで注意すべきは、リンクの設定された場所の後ろにそう書き加えてあっても、あまり意味がないということである。

利用者がリンク先を開く前に、新しいウィンドウで開くことを伝えてこそ、利用者への配慮といえる。

注釈・説明

専門的な語句が出てきた場合などには、その語句の後にかっこ書きでその意味を書き添えたりする。

注釈や説明を添えることは、ひじょうに大事なことではあるが、それが文章の中に突然出てくると、音声読み上げの妨げとなることもありうる。

< 例 >

米子市は、アクセシブル(誰にでも利用できること)なホームページをつくれます。

かっこがあるので、「誰にでも利用できること」は、「アクセシブル」の説明であるということがわかるが、それはかっこを目にしているからである。音声読み上げでは、「かっこ」「かっこ閉じる」と読み上げないので、「あくせしぶるだれにでもりようできることなほ一むページを」と読んでしまう。

語句を説明したい場合には、

「米子市は、誰にでも利用できる、つまりアクセシブルなホームページを…」

あるいはもっといいいに、

「誰にでも利用できることを『アクセシブル』であるといいます。米子市はアクセシブルな…」

という表記を心がける。

その文中に説明を入れるのが難しい場合には、文の後に改行を入れ、

「[注] アクセシブル...誰にでも利用できること」

という注釈のつけかたもある。

とにかくその文章を、一度声に出して読んでみることである。

そのときには、「こう読んでくれるはずだ」という先入観を捨てて読む。それだけで誤読されそうな表現や、配慮の足りない表現に気づくだろう。

その上で、実際に音声読み上げブラウザに読ませて、最終的な検証を行えば、「伝わりやすい」文章となっているはずである。

ウェブサイトがブラウザによって、また同じブラウザでもそのバージョンによって見えかたが異なることのあるように、すべての音声読み上げブラウザがここに挙げた例と同じように読むという保証はない。

音声読み上げブラウザによって異なった読みかたをする可能性を考慮し、誤読の少ない表現を使う配慮(「～」や「方」を使わない、など)をしながら、ウェブページ用の原稿を作成する必要がある。

最後に、この「音声読み上げブラウザの読み上げかた」の公開を快諾してくださった日本 IBM 株式会社に感謝の意を伝えたい。